

## 三階教写本『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』 一卷の基礎的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本印度学仏教学会 公開日: 2017-09-15 キーワード (Ja): 三階教, 信行, 敦煙写本, 発菩提心, 杏雨書屋 キーワード (En): 作成者: 西本, 照真 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/625">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/625</a>

# 三階教写本『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』 一卷の基礎的研究

西 本 照 真

## 1. はじめに

武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の敦煌写本は、その影印版が『敦煌秘笈』(全9冊予定)として刊行が進んでおり、現在、影片冊八までが刊行されている。既刊の影片冊五に所収の No.411 写本(羽411)<sup>1)</sup>は、尾題が『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』一卷と記された三階教写本である。この写本に関しては、すでに別稿において『敦煌秘笈』に紹介された写本の特徴をもとに若干の検討を行い、合わせて翻刻を発表した<sup>2)</sup>。そこで、本稿では『対根浅深発菩提心法』という文献の題名、撰述年次、科文などに絞って基礎的な研究を行うこととする。

## 2. 題名と撰述年次

『人集録明諸経中对根浅深発菩提心法』(以下、『対根浅深発菩提心法』と略称)という題名の意味するところは、まず「人集録」というのは、三階教文献は基本的に各々のテーマに関する経証を収集・載録したものであり、(仏ではなく)人が經典を収集・載録したテキストという意味で「人集録」と呼んでいる。三階教籍の目録に『人集録都目』(敦煌写本 P2412R2)と名づけられた文献が現存する。三階教徒は、開祖の信行が經典から集録した文献をすべて「人集録」と呼んだのである。この写本においても、「已上人語、已下経文」、「此依経引義、非次第抄文」、「已下次第抄経文」などのような割注がなされ、經典の直接引用(「経文」、「次第抄経文」)、經典の取意(「依経引義」)、編集者の解説(「人語」)が明確に区別されている。三階教典籍を人集録と呼び、経文とその他の語を厳密に区別しようとする試みは、たとえば本邦本『三階仏法』巻四の末尾にも、「又明此一卷人集録経文内、唯除減五十字是人語已外、余者皆悉普是経文、或有人語引経説者、或有唯是経文説者」<sup>3)</sup>のごとく確認することができる。

「明諸経中对根浅深発菩提心法」とは、「諸經典の中の、根機の浅深に対応して

菩提心を発す教法を明らかにする」という意味である。このように根機の浅深に対応して実践すべき教法を明らかにしようとする意識は三階教思想に通底しており、三階教の文献を掲げた経録においても、いくつも『対根…』と名づけられた文献を見出すことができる。ここでは、『開元録』巻十八に収載された三十五部四十四巻の三階教文献の中で、「対根」「根機」などの語を文献名に含むものを挙げてみると、次のとおりである<sup>4)</sup>。

- ①『明諸經中对根浅深發菩提心法』一卷
- ②『根機普棄法』二巻
- ③『明諸經中对根浅深同異法』一卷
- ④『明諸經中对根浅深末法衆生於仏法内廢興所由法』一卷
- ⑤『広明法界衆生根機上下起行浅深法』一卷
- ⑥『略明法界衆生根機上下起行浅深法』一卷
- ⑦『明諸經中对根起行浅深敬三宝法』一卷
- ⑧『明一切衆生対根上下起行法』一卷

この中で、①が今回の写本の文献であるが、②から⑧の文献名においても「対根浅深」「根機上下起行浅深」「対根起行浅深」「対根上下起行」などがキーワードとなっており、三階教思想の根幹に根機に対応した実践を提起しようという意識が強く働いていることがうかがわれる。

また、「發菩提心」を題名に冠する文献名を『開元録』巻十八に尋ねれば、

- ①『明諸經中对根浅深發菩提心法』一卷
- ②『明世間五濁悪世界・末法悪時・十悪衆生・福德下行，於此四種具足人中，謂当三乘器人，依諸大乘經論，学求善知識，發菩提心法』一卷
- ③『明諸大乘修多羅内，世間出世間兩階人發菩提心同異法』一卷

の3文献が挙げられている。すでに述べたごとく①が今回の写本の文献であるが、①と③の文献は実は三階教文献を刻んだ金川湾三階教石窟石経にも刻まれているものであり<sup>5)</sup>、また、③の文献に関してはその注釈書が作成されて写本としての流布が確認できるのであり<sup>6)</sup>、三階教思想における「發菩提心」に対する関心の高さがうかがえる。

続いて、本文献の撰述年次に関して検討してみよう。この写本の尾題の次に記された識語には、「大隋開皇六年曆次丙午四月十五日在相州法藏寺撰」とある。すなわち、この文献は隋の開皇6年(586)4月15日に相州の法藏寺において撰述されたというのである。この識語の情報の真偽を判定することは容易ではない

が、信行は開皇9年(589)に長安の都に召される以前は、若い頃から相州で修行をすすめており、開皇3年、開皇7年の書簡ではいずれも相州光巖寺に住していたと記されている<sup>7)</sup>。したがって、相州一帯の諸寺で修行をする過程で、開皇6年に相州法蔵寺に住していたということも十分に考えられる。また、『続高僧伝』の「信行伝」では、年代は定かでないが、長安に召される以前のこととして、「相州法蔵寺において、具足戒を捨てて、親ら労役に執き、諸の悲敬に供える」<sup>8)</sup>とある。この文献が内容的に三階教思想の展開の中でどのあたりに位置するのか、十分に検討した上で最終的な判断を下すべきであろうが、以上の点から見る限りでは、開皇6年に相州法蔵寺において、『対根浅深発菩提心法』を撰述した可能性は十分にありうることといえる。

### 3. 科文

『対根浅深発菩提心法』の科文を検討する場合に問題となるのは、羽411写本は冒頭の約一紙ほどを欠いている点である<sup>9)</sup>。羽411-1の冒頭は「第三明一切僧尽者、於中大判有三□□□凡夫僧、二者二乗僧、三者菩薩僧。」という一文から始まっている。続く段落は「第四明一切衆生尽」、「第五離一切悪尽」、「第六修一切善尽」となっており、次の箇所では「第二大段明発菩提心寛狭因浅深法者、於中有六階。」とあることから、写本の冒頭において欠けている箇所は、第一大段の第一と第二の箇所であることが推定される。この第一大段の大段名と、第一と第二の段落名については、第二大段の六階の第一の箇所に「第一明一切仏尽者、上明寛狭長短尽、此明見仏因浅深義。」とあり、第二大段の六階の第二の箇所に「第二明一切法尽者、上明寛狭長短尽、此明聞法因浅深義。」とあることによってある程度推定できる。すなわち、第一大段の大段名は「第一大段明発菩提心寛狭長短法」であり、第一大段の第一は「第一明一切仏尽」であり、第二は「第二明一切法尽」であったことが推定される。この推定を裏付ける資料となるのは、敦煌写本P2283『発菩提心法』(仮題)である<sup>10)</sup>。この写本の83行から110行にかけての箇所に、「発菩提心浅深法、於内有四段。」として、『対根浅深発菩提心法』の全体にわたる段落構成と引用經典名・巻数・品名などが460字余りにわたって略説されているのである。そこで、『対根浅深発菩提心法』(羽411)と『発菩提心法』(P2283)の「発菩提心浅深法」の科文を対照させてみると、以下の通りとなる。

『対根浅深発菩提心法』(羽 411)	「発菩提心浅深法」(P2283)
	発菩提心浅深法、於内有四段 第一発菩提心寛狭浅深法 第二発菩提心因浅深法 第三発菩提心能受根機浅深法 第四対根起行浅深法
[第一大段、明発菩提心寛狭長短法] [第一明一切仏尽] [第二明一切法尽] 第三明一切僧尽 第四明一切衆生尽 第五離一切悪尽 第六修一切善尽	第一発菩提心寛狭浅深法 普帰三宝(仏) (法) (僧) 普度衆生 普断一切悪 普修善尽
第二大段、明発菩提心寛狭因浅深法 第一明一切仏尽(此明見仏因浅深義) 第二明一切法尽(此明聞法因浅深義) 第三明一切僧尽(此明帰僧因浅深義) 第四明一切衆生尽(此明度脱衆生因浅深義) 第五明離一切悪尽(此明離悪因根本浅深義) 第六明修一切善尽(此明法界行因根本浅深義)	第二発菩提心因浅深法 若欲得見仏 聞法因 帰僧因 度生因 断悪因 修善因
第三大段、明発菩提心能受根機浅深法 一者明三業具足 二者明身口調柔 三者明種性成就、発心成就、行方便成就 四者明久行六波羅蜜多… 五者明四親近行 六者明能受一乘法人 七者具明能受根機	第三能受根機浅深法
第四大段、明発菩提心対根起行浅深法者、於中略説九門 一者明下根菩薩敬法師法 二者明下根菩薩所知邪正分齊法 三者明下根菩薩所依善知識法 四者明下根菩薩菩提種子法 五者明下根菩薩所受菩薩戒及護戒法 六者明下根菩薩行菩薩行法 七者明下根菩薩説法法 八者明下根菩薩敬三宝法 九者明下根菩薩学苦行浅深分齊法	第四対根起行浅深法者、於中有九段 一者敬法師法 二者所知邪正 三者依善知識 四者菩提種子 五者受菩薩戒法及護戒境界法 第六学菩薩行法 第七敬三宝 第八作法師法 第九者苦行浅深分齊

両者の科文を対照させてみると、第四大段の第七と第八が入れ替わっていることを除いてほぼ一致していることが確認される。また、P2283の「発菩提心淺深法」の各段に挙げられている引用經典に関しても、『対根淺深発菩提心法』の引用經典とほぼ対応していることが確認された。

次にそれぞれの大段落の内容について概観してみよう。まず、第一大段は「明発菩提心寛狭長短法」(発菩提心の寛狭と長短の法を明かす)ことを掲げた段落であり、「一切の仏について明かす」、「一切の法について明かす」、「一切の僧について明かす」、「一切の衆生について明かす」、「一切の悪を離れる」、「一切の善を修める」の六段からなる。すなわち、この文献において発菩提心というのは、一切の仏・法・僧に対して帰依する心を起こし、一切の衆生を救う心を起こし、一切の悪を離断する心を起こし、一切の善を修める心を起こすということの総体を発菩提心と捉えていることがうかがえる。帰依三宝、度衆生、断悪、修善という仏道修行において極めてオーソドックスな内容であり、三階教文献においても、『対根起行法』の三階出世道の基本的な項目とも大部分が一致している。続く第二大段は、「明発菩提心寛狭因淺深法」(発菩提心の寛狭の因の淺深の法を明かす)ことを掲げた段落であり、見仏の因、聞法の因、帰依僧の因、度衆生の因、離悪の因、修善の因の六段からなる。第一大段では発菩提心の内容としての六段を明かしているのに対して、第二大段は第一大段のそれぞれの菩提心を発していくための原因・条件を明かしているのである。次に、第三大段は、「明発菩提心能受根機淺深法」(発菩提心の能受の根機の淺深の法を明かす)ことを掲げた段落である。身口意の三業が共に優れた者、身と口が調柔、智慧平正で、諸の煩惱の無き者など、菩提心を得ていく主体となる根機(能受の根機)について七段に分けて明かしている。第四大段は、「明発菩提心対根起行淺深法」(発菩提心について根機に対応した行を起こすことの淺深の法を明かす)ことを掲げた段落であるが、実際には下根の菩薩に焦点をあててその実践の法を明かしている。段落の構成は、①下根の菩薩が法師を敬う法、②下根の菩薩が知るべき邪正の分齊の法、③下根の菩薩の帰依すべき善知識の法、④下根の菩薩の菩提の種子の法、⑤下根の菩薩の受ける菩薩戒と護戒の法、⑥下根の菩薩が菩薩の行を行じる法、⑦下根の菩薩の説法の法、⑧下根の菩薩の三宝を敬う法、⑨下根の菩薩の苦行に関する法、の九段からなる。

#### 4. 結び

三階教の新出写本『対根淺深発菩提心法』について、題名、撰述年次、科文な

どに絞って基礎的な研究を行った。学会発表においては『対根浅深発菩提心法』の第四大段の内容についても概観したが、本稿においては紙数の関係で割愛した。本格的な研究はこれからであるが、羽411写本ならびに写本に筆写されている『対根浅深発菩提心法』に関して、現時点における筆者の見方を簡略にまとめておきたい。

①羽411は、影片を見る限りにおいて他の三階教関係の写本において7世紀後半から8世紀前半に書写されたものとみられる善く整った上質の写本の特徴が近似しており、写本の真偽という点に関しては初唐の敦煌写本の特徴を保持した良質の写本といえるように思う。

②『対根浅深発菩提心法』において衆生の機根や教法などを分別する際の枠組みとして用いているのは、第一大段では菩薩・二乗・凡夫、大乘・縁覚乗・声聞乗・人天乗など、第三大段では発菩提心能受の人として一乘法人などの語が注目される。第四大段では、上と下の二段階に大きく分けて、下根の菩薩の実践すべき行について焦点をあてて説いている。この両段を区別する基準となっているのは、仏の在位の好時か仏の滅後の悪時か、浄土か穢土か、仏・菩薩か二乗・凡夫か、出世間か世間か、などの基準であり、それぞれ後者のために説かれている経文を下根の菩薩の経証として引いている。しかしながら、この文献では、晩年に長安で撰述されたと考えられる敦煌本『三階仏法』や『対根起行法』（仮題）などに見られる第一階・第二階・第三階の三段階の整った枠組みは用いられていない。したがって、羽411の識語の開皇6年（586）に相州法蔵寺において撰述されたという記述は、三階教文献の成立史からしても内容的に不都合の生じない妥当な位置にあるということができよう。

③同時に、仏滅後の悪時の衆生に焦点をあてて彼らのための仏法を説き明かそうとする視点や、その中での中心的な柱ともいえる普敬と認悪の実践など、三階教の思想と実践の核となるものは『対根浅深発菩提心法』の段階でも明確に位置づけられていること、経証に関しても晩年の撰述と推定される敦煌本『三階仏法』巻二に引かれる第三階の仏法の経証と同じものがすでに多く用いられている<sup>11)</sup>などの点で、三階教的特質がすでに十分発揮されているといえる。

④信行と同時代の仏教者においても、たとえば浄影寺慧遠は『大乘義章』巻九で「発菩提心義」について『大乘起信論』などに基づいて発菩提心の義を明らかにし、智顛も『摩訶止観』巻一の冒頭から「発大心」について詳細に論じている。また、唐代に入っても、華嚴では『華嚴発菩提心章』、法相唯識では『勸発菩提

心集』など、菩提心をテーマとした文献が次々と著されている。禅宗や密教においても、当然、重要なテーマとなっている。したがって、菩提にむかってどのように歩いていくか、菩提をどのように達成するのか、という問題は同時代の仏教者たちが共通に抱えていた重要な問題意識であり、その一つの回答が今回見た三階教における発菩提心法であったといえる。それぞれの派が、共通の問題意識を抱えつつ、オリジナリティーを発揮して、発菩提心に迫ろうとしたのである。これら諸派の菩提心義との比較もなされるべきであり、今後の課題としたい。

- 1) 『敦煌秘笈 影片冊五』, 武田科学振興財団, 2011年11月, pp.270-282. 因みに、『敦煌秘笈 目録冊』(武田科学振興財団, 2009年3月, p.264)によれば, 羽728V写本は、『普親観音頌除十惡法』と題した写本であり、『影片冊九』に収められる予定となっている。この写本も、題名からして明らかに三階教関係の写本であると推定される。影片冊の刊行を待って、改めてその内容を研究・紹介する予定である。
- 2) 拙稿「杏雨書屋所蔵三階教写本『人集録明諸經中对根浅深発菩提心法』一卷(羽411)翻刻」(『東アジア仏教研究』第10号, pp.37-55, 2012年5月)。
- 3) 矢吹慶輝『三階教之研究』(岩波書店, 1925年→1973年), 別篇p.415。
- 4) 大正55.474c-475a. 拙著『三階教の研究』(pp.159-161, 春秋社, 1998年)。
- 5) 拙稿「西安近郊の三階教史跡—百塔寺と金川湾唐刻石窟石経—」(『印度学仏教学研究』48-1, 1999年), 張総・王保平「陝西淳化金川湾三階教刻経石窟」(『文物』564, 2003年), 拙稿「金川湾三階教刻経の歴史空間」(相川鐵崖古希記念『書学論文集』, 木耳社, 2007年, pp.279-286), 拙稿「南北朝隋唐期の仏教思潮と石経事業—金川湾三階教刻経にみられる独自性と普遍性」(氣賀澤保規編・科学研究費補助金研究成果報告書『中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相』2009年)。
- 6) 前掲拙稿「金川湾三階教刻経の歴史空間」参照。
- 7) 前掲拙著, p.56 参照。
- 8) 大正50.560a.
- 9) この欠落部分を補う可能性があるのはすでに述べた金川湾三階教石窟に石刻された文献である。この石経は全体的には摩耗が激しく判読不明の箇所も多いが、『対根浅深発菩提心法』の冒頭部分に関してはほぼ判読可能のようである。現在, 中国社会科学院の張総教授により同石窟の石経について研究が進められており, その内容の発表が待ち望まれる。
- 10) 前掲拙著, pp.198-205に解題, pp.602-608に翻刻。
- 11) 第四大段の第四に引く『涅槃経』の直心の箇所, 第六に引く『維摩経』の菩薩の八法の箇所, 第七に引く『法華経』安樂行品の四安樂行, 第八に引く『法華経』の常不軽菩薩の実践などが, 敦煌本『三階仏法』巻二にほぼ連続して引かれている。

(キーワード) 三階教, 信行, 敦煌写本, 発菩提心, 杏雨書屋

(武蔵野大学教授, 博士(文学))